

自民党市議団 視察報告書

研修者	山上高昭、関井利夫、平井信太郎、森和也、中村真一、平田不二香、原田真光、岡部かおり
日時	令和5年10月12日(木)
場所	八戸市公会堂・公会堂文化ホール
テーマ	八戸市の文化・スポーツによるまちづくり
対応者 (講師)	青森県八戸市長 熊谷雄一
概要	<p>はじめに 八戸市 太平洋を臨む北東北東岸に位置し、面積は約305キロ平方メートル、人口約22万人の中核市 1929年の市制施行以来、全国有数の水産都市として、また東北有数の工業都市、国際物流拠点都市として着実な発展を遂げてきた</p> <p>背景と取り組み 「はちのへ文化のまちづくりプラン～八戸市文化芸術推進基本計画～」 基本概念：文化芸術を通して市民が生き生きと心豊かに暮らせるまち、文化芸術の力を活用した魅力溢れるまち、八戸の実現 「八戸市スポーツ推進計画」 基本概念：スポーツを楽しむたくなるまちの実現と氷都八戸の振興</p> <p>文化によるまちづくり 古くは藩政時代の俳諧から始まり、八戸三社大祭に彩りを添える「法霊神楽」などの伝統芸能や各ジャンルの文化活動が繰り広げられてきた 八戸市では市民の多様で特色ある自主的な文化活動を「多文化」と定義 「多文化都市八戸推進会議」を立ち上げ、その過程で文化政策の新たな展開として地域資源の再評価や地域課題にアートの力を活用して取り組むアートプロジェクトの必要性などがビジョンとして示された 一方、中心市街地活性化という地域課題がクローズアップされた 旧市街地の商業地域の衰退と歩行者通行量の減少 →20年間で約3分に1に</p> <p>2011年2月オープン 八戸ポータルミュージアム はっち 年間来館者数約80万人 八戸の芸能や食、伝統工芸を伝える市民作家による展示・体験</p> <p>酔っ払いに愛を～横丁オンリーユーシアター →中心街にある8つある横丁と盛り上げるイベントを連携して実施 空き店舗の利用や吹き出しによる通行人との時間を越えた無言の交流</p>

南郷アートプロジェクト 2011～2020

→アートで地域の魅力を発見するアートプロジェクト

→地域住民とアーティストが協働し、ジャズや郷土芸能などの地域資源とコンテンポラリーダンスを掛け合わせたプロジェクト

八戸工場大学 2013～2020

産業都市八戸にある工場を地域文化資源と捉え、大学になぞらえて工場のことを学ぶ講座や工場をテーマにしたアートプロジェクトを行う「講義」

八戸ブックセンター2016年12月オープン

面積約315平方メートル

在庫数約10,000冊

施設運営の3つの基本方針

①本を読む人を増やす

ゲストを招いてのトークイベント

講師を招いてのアカデミックトーク

ゲストによる選書棚

②本を書く人を増やす

執筆出版ワークショップ

高校生対象に実施した「超ショートショート講座」

作品を冊子にして配布

キックオフミーティング

本づくり、執筆・制作、デザインに興味がある方で2023年3月に立ち上げたクラブをサポート

③本でまちを盛り上げる

ギャラリー展、トークイベント、ブックサテライト

全国でも珍しい、書店機能を持ち合わせた珍しい公共施設

→本を買って手に取る体験

未読ジャンルへの選択肢を提案

品揃えの補完(民間書店との棲み分け)

読書会ルーム

カンヅメブース

→本などを執筆したい人に貸出している執筆専用の部屋 2023年8月末308人登録

「本のまち八戸」の拠点機能

民間書店との連携

公立・学校図書館、教育機関との連携・サポート

公共・民間施設との連携

→書店員同士の勉強会・ブックフェスの実施・パワープッシュ作家の書籍の共同販促・ブックセンターの書籍等飯場業務委託

八戸まちなか広場 マチニワ 2018年7月オープン

1,249平方メートル

オープン時間 6:00~23:00

貸出時間 9:00~21:00

マチニワの活用例

クラフト市・フードマルシェ・八戸三社大祭山車展示

八戸市美術館

コンセプト

種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を想像する美術館

ジャイアントルーム

→エントランスとしての役割のみならず、人々が自由に集い、学び、活動する場所も担う  
巨大な空間

フリースペース・ジャイアント食堂・貸館利用

ホワイトキューブ

→より深く学び、さらに違う専門性に偶然出会える、それぞれに個性がある個室群

シーンエリア

→静かな空間

様々な目的や役割の文化・スポーツ施設が中心市街地に集積

公共の文化施設への投資が、民間による都市機能への投資を呼び込む

→居住推進や雇用創出など地域社会や経済へのプラス効果

スポーツによるまちづくり

氷都八戸

冬季は雪が少なく厳寒で空気が乾燥している八戸では、市内各所の貯水池は天然のリンク  
として広く市民にアイススケートが親しまれてきた

全国最多14回スケートの国体開催

長根屋内スケート場(YSアリーナ八戸)

国際大会の開催が可能なスピードスケートリンク

音楽イベント、コンベンション等に利用できる多目的利用

地域防災拠点

FLAT HACHINOHE

民間施設が整備・管理・運営する施設を市が必要とする2,500時間/年だけ貸借・利用する、新たな形の官民連携モデル

アイスホッケー・フィギュアスケート・バスケットボール等での利用

地域プロスポーツの存在

市内に4つ

アイスホッケースクールの実施

小学校児童との交流

清掃活動

鉄道利用促進のための応援切符の販売

八戸スポーツコミッション 2022年4月

目的

①スポーツ合宿・大会誘致

1人あたり500円/泊の補助金

②地域プロスポーツ観戦促進

広告料補助金の交付

ホームゲーム時のシャトルバス運行

文化の力、スポーツの力

社会と個人を繋ぐ、中間的組織・団体の役割や機能低下という社会課題

→関心やテーマに基づくコミュニティと当事者を増やすことが重要

はっちのアートプロジェクト 市民集団 まちぐみ

街に面白いやワクワクを増やすプラットフォーム

伝統工芸体験

実際に体験することでより身近な存在へ

八戸ホコテン

中心街の空き家を改修したまちぐみラボ

「組員」は500人を超える

アートファーマープロジェクト「建築ツアーガイド」

→市民ガイドの醸成

スケートによる教えと学びの循環

おわりに

物理的な拠点と財政面への取り組み

はちのへ大型公共施設見える化シート

→維持管理コスト等に見える化

八戸市中心市街地まちづくりビジョン 2023

①人が主役のまちづくり

- ②地域の資源を活かす
  - ③活力ある経済と社会
  - ④参加と積極的なマネジメント
- まちなか Wi-Fi・8つの横丁  
開かれたパブリックな場を作る

#### 所感

八戸三社大祭を始めとする地域文化に根差した施設や、気候を利用したアイススケートが盛んに行われているという地域特性を活かした施設を設置して、着実に利用者が伸びていることは特筆すべきことである。かつ、大野城市よりも広い市域を持つ八戸市ではあるが、利便性の面からとおそらく将来の本格的な人口減少を見据えて、その施設を半径 200～300メートル以内に集約させていることはコンパクトシティの実践例と言える。自由な使い方ができる八戸まちなか広場「マチニワ」は行政が運営している施設では珍しく、6:00～23:00 という早朝から夜間まで開けており、早朝 7:00 前に伺ったところ地元の方が多く集っている光景を見て実際に利用され人々の集いの場になっていることを実感した。また、美術館でありながら、イベントとして食堂等にも利用することで親しみやすい場にしようという試みは大野城心のふるさと館でも参考になると思われる。公立のブックセンターも大変珍しい取り組みで、本離れが進む現代において高校生が自らの作品を製本するという経験は意義深いと思われる。プロスポーツチームが地域住民との交流を深めることで地域が活性化して、チームのサポーターが増加するという相乗効果が生まれることは見逃せない。一方で、中心市街地では駐車スペースが店舗の前で確保しづらい旧来の商業地域としての立地がボトルネックとなっているのか、空き店舗が多く散見された。報告で指摘されていたように所謂「ハコモノ」はイニシャルコストが高く、またランニングコストも必要になってくるので公共施設の見える化は必須であるが、闇雲に見える化をすれば良いというものではなく市民に広く周知することが求められる。広報やホームページ、SNS だけで充分なのか検討が必要である。他の報告とも重複するが、市民を巻き込んだ形での文化・スポーツの促進がこれからの時代のキーワードになるのではないだろうか。

一作成者 原田真光一